

日本經濟電報
(第二)

は
併落を續く

◆東京市場 最低値が七二圓を回り現物は幾分持直しの兆

相場は現物市場は下落を
中場は停滞の現象あり
日本は文部省著しく減退し
元漁獲は幾分持ち直す
多少持ち直し傾向ありしかし
米市場の現物は今廿七日より
又戻り廿四回臺を破り廿二
九十九錢となり、當日高

廿七日後藤
廿六日後藤
手満、殆んど手を出るぬ
稀なる安値を呼んで、先づ、
最も低値廿三閻云々近頃
に於ける優良米の市
疑はし。廿七日の東

高	先	現	月	期
安	渡	有	月	期
鐵	十	有	月	期
市	二十	有	月	期
場	三十	有	月	期

港邦人街の大惨劇 博子身を持ち崩した ラスカボーライの兇行

二弾を放つてボツスに重傷を負はせ
自分も同じ短銃で自殺す

第三回 金魚の贈物

に倒れた鼻孔から絶えず涙が流れ出る。彼は自殺したのではあるまいか?

▼ピストルを抜き出すと、
「お前が死んでやる！」
と叫びながら、

「て、砲門の構造とし乍ら犯人の手筋が、どうもアーヴィングの手筋に近寄つた趣向」の手筋で、アーヴィングは、隠居する處へ巡回中のクーリー博士を、帝國病院の井戸に落水させて、帝國病院に依づて内に飛込ひだる處清水は自己ターゲットが急難に依づて

手當 来てドタ一は直に
をしたが其はアスカのフラン
ソニン詰社會社に日本
字形になリハーリング、リチウム
ド會社製造三十八番口徑の短
ド耳より脛へかけて射撃し
て右耳より脛へかけて射撃し

枕も布團も血で染め抜いて居たが同人野々口曰く「船抜け」せんとしたのは全く企み射殺せんとしたのは全く企み

企てた者が見と三進の遺書を見た。九月、初旬ビ、に田舎、し、九月、初旬ビ、して置いたが、其一通は酒屋庄兵衛の手紙で、會社の漁船へクラ號宛だ。宛た者は此兄行をして迷惑をかけた事を説いて居た。清水は探

し不^{シフ}が其處^{シキツ}へ被^{ハセ}る
氏^{シテ}の妻菊子^{ヒカエコ}が馳付^{ハシフ}け
し息^ヒの下^シから帳^{タカ}
て早く國^{クニ}へ歸^カれ[!]

つガフカラし當時に
病院から廻されたア
兎行前後の模様に就て酒巻カヨ夫人

夫人に語る「私は今朝八時頃が来て野々口さんと會ひ度て、野々口さんは目に見えただからまだ見へない」とたる清水は、手の自由に行ふを見ましめたが暫らくして、自分が来たから「清水がよかることないでござりません」と云ひ、兩人が意しないでござりました。

サクランボン(七)

發砲して

罰金五百弗

二ヶ月牢獄の處刑

去る九月十日夜ビニーラ郡

レドーの農舎に於て賭博上の

訴へられたるエヴァ達を處する間

胎おも過日オーピルの上等裁判所にて陪審員の結果は有罪と

字之八に對し五發まで続撃を

加へたるが爲め該役未遂として

宣告あり判事ダレゴト氏に遠

蘇に對し罰金五百弗と二ヶ月間

郡監獄に入牢すべき旨を申渡し

認めたるが爲め該役未遂として

宣告あり判事ダレゴト氏に遠

蘇に對し罰金五百弗と二ヶ月間

郡監獄に入牢すべき旨を申渡し

氏方にて開かれたデルカ吟(支那)例會は多數開人打集まり各々句合であつた

に熱中したが非常に興味ある會

台であつた

り度き者たれば本人は角市日會へ進む

長男は捨郎と命名▲同上鐘ヶ江

妻助氏二女は善子と命名した

サカエ・ミ・ス・ス・

元サタマナ族所に止

り他河下の重要な農産物は一般

市に寄付

り度き者たれば本人は角市日會へ進む

行せる山なり

出生古内ム街近くこ屋旅

館主江加松六郎氏長男登は廿五

石井半兵氏

井半兵

の發展策に付て議論の傍

の正國儀右衛門氏は

父兄會會來月一日午後七時よ

後一時櫻府佛教會にて葬儀執

行せらるる

の發展策に付て議論の傍

の正國儀右衛門氏は

父兄會會來月一日午後七時よ

後一時櫻府佛教會にて葬儀執

行せらるる

の發展策に付て議論の傍

の正國儀右衛門氏は

父兄會會來月一日午後七時よ

後一時櫻府佛教會にて葬儀執

行せらるる

の發展策に付て議論の傍

の正國儀右衛門氏は

父兄會會來月一日午後七時よ

後一時櫻府佛教會にて葬儀執

行せらるる

行せらるる

行せらるる

行せらるる

行せらるる

</

